

澠井孝位全集

第二卷

龍井孝行全泉

第二卷

瀧井孝作全集 第二卷

定価四八〇〇円

昭和五十三年十月十五日印刷

昭和五十三年十月二十五日発行

著者 瀧井孝作

発行者 高梨茂

印刷者 白井倉之助

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二―八―七

電話(五六二)五九二一

振替東京二―三四

©一九七八 検印廃止

瀧井孝作全集 第二卷

目次

チヨ子の自由	九
別荘番	三一
孤	三七
長火鉢	四九
仮寓	六三
澄む	七三
弾力のある気持	八一
妻の親	九三
幻想曲	一〇五
亀田の娘	一一一
露滴庵近事	一五七

仏法僧

一七一

ある転機

一八一

桃源の湯

一九一

ゲテモノ

二〇三

松倉

二三三

養子（大正十五年）

二四三

俳句会

二五三

ジャコブ

二六九

ある女の人

二八三

大阪商人

二九一

お葉小母

三〇九

結婚まで

三一九

見習記者

三五三

博打

三六九

田舎の父

三七九

紋付

三九七

編集後記

四〇九

口絵 著者（昭和三年、奈良公園）

撮影 小川晴暘

小說
二

チヨ子の自由

一

私はばあやと二人、遅い昼飯を済まして尚茶の間に居た。その時門内の甃を渡る足音がし玄関へ誰か来た。ばあやが起つた。

「チヨ子か。よく来たわネ」ばあやの声がし、直ぐに二人が茶の間の口まで来た。

敷居に膝をつけチヨ子はお辞儀した。質素な身なりで顔は真紅に上氣してゐた。道を歩いて直き故と思へた。

——チヨ子は、ばあやの姪で今年二十歳^{はたち}、池袋の方である人の世話になつてゐる婦人である。

食卓の根に坐つたばあやは、姪に來た道を聞いた。

姪は襦袢に重ねた袷の襟首が暑いかして頤を浮かし、「宜いお住居ですこと」というて、叔母には松林の中の住居を、この前始めて來た折探しあぐんだ由をのべた。

「この間は留守で氣の毒したな。まあ菓子を」と言うて、私は口を結んだ。

この間の晩歸ると、提灯の明りが届く玄関先の石の上に紙包があつた。鉛筆の字でチヨ子の言葉が出てをり、

留守のあひだに來たのが知れた。紙包は開くと、菓子を蟻がたべてをり、そのまゝ芥場へ捨てたのである。

ばあやは苛々^{いらぐ}して來た。

「お前はほんとに氣働きがないよ。留守なら何故下の百姓家へ尋ねないの。近所へ行つてゐるのなら其れで分るわけぢやのに」

チヨ子はべつたり尻を落した女の坐り様で坐つて、何を叱られるのか分らない、安心した面持でゐた。

私は番茶の湯呑を仕上げ、チヨ子にはお昼御飯済んだかを聞いた。

左うしてばあやは食卓を畳んだ。

私は茶の間を出た。庭に佇むと前水の飴色の水の中に紅い鯉魚の姿が動かなかつた。其れを見てゐた。茶の間でチヨ子と叔母とが話をしてゐる、声が小耳についた。

「隙を窺つてゐて、昼から出て來て終つたの」

「小父さんの家へもう帰らないのかい」

「え、荷物を持出して駅に預けてゐます。大和^{やまと}の実家^{うち}へ行く心算^{しんさん}ですけど、こちらに少しの間置いて頂くわ」
稍談話が断れた。ばあやがかう言つた。

「わたしもこの間病氣してから、ポンプも汲上げて貰ふのだし、お前が居てお呉れだと便宜がよいがネ」

私はチヨ子の無造作な話の有様に、興味を感じた。其境遇に前々の繋りを持つ私は、茶の間へ戻り顔出しをした。チヨ子は一寸羞かんだ。

「池袋の方で何とか言つてくるだらうが、チヨ子が玆にゐなければ、左うさせなさい」

私はばあやと両方を見て言つた。大和の実家へ歸るのは縁を断つ事になるが、直ぐには無理な事を、三人が頭

に置いてゐた。チヨ子も左うさばくしたものであるまい、未練はある。

叔母は黙つてゐた。叔母自身が其れを領く時は、姪を甘やかす事になる。

私は口を結んで、其他は言はなかつた。事件に悪びれぬチヨ子を見てゐた。私は少時して座蒲団の膝を上げ、座を外して出た。彼女の好きなやうにさして置くのであつた。

庭樹は梢が透き澄んだ秋の日が当つてゐた。何時もの鯉の姿は前水に浮出てゐた。私は書斎にしてゐる、離屋へゆく飛石を一つ一つ踏み締めて渡つてゐた。

離屋に閉ぢ籠つて仕事をし、私はランプがいる時刻になつた。足音がしてチヨ子が薄明りの屋内を見て、電報を私に手渡した。私の宛名で出し手は池袋のF、チヨ子が失踪した故叔母を一寸よこして呉れとある。

「どうしましょ」チヨ子の背後の障子は開いてゐた。私は

「叔母さんは病気で汽車にのれないよ」左う聞かせ乍ら下駄の上へ降り、チヨ子が後を閉めて従^ついて来た。

ばあやは縁側に出てゐた。叔母に

「池袋の方へ、帰りませうか」と姪は言つた。

「お前は覚悟して出て来たんぢやないのかい。直ぐ戻るんなら人騒がせをしない方がようござんす」

「左うね」

「ぢやから薄野呂ぢやよ」

叔母は姪を左う断定してゐた。またばあやは利己的にチヨ子を帰したくなく、内の働きを助けて貰ひたがつた。

私はチヨ子に

「こちらの迷惑にはならぬよ」と左う言つた。

「電報の返事、チヨ子の来た事と叔母さんの病気でゆけない事とを書く」と、事実じつに順がふ事にした。
ばあやは横でかう指図した。

「それでは済みませんが、ハガキを一本書いて下さいな。チヨ子が大和の実家へ戻ると申して来ましたゆゑひき留め、叔母が預つて置きます。とね」

「何うも済みません」と、チヨ子は私に頼んだ。

「うん」

縁側に硯箱を持出し、私は外の明りをハガキにうけて、雑に用件を記した。

左うして晩、茶の間に女共を一緒にしておいた。私は離屋に閉ぢ籠り、机上のランプの明りで今夜中に仕あげる、仕事の前に坐つてゐた。

何時なんじかに、庭の上に物音をさせ、ばあやとチヨ子は提灯をつけ、離屋の戸口まで来て留つた。

「さきに寝やすみます、用はありませんか」

「あ、お休み」

「お休みなさいませ」

「あ、お休み」

夜深更よふけ、明方かもしれなかつたが、私は母屋に戻つた。

茶の間には寢床が二つ、ばあやの片脇に竝んで、チヨ子の前髪が出てゐた。枕元の畳の上には、束髪たうまつのマゲのやうな物が紙の上に出してあつた。

——私はチヨ子と直かに何の色合ひもない間柄であるが、その異性に対してはある感情が付き纏うてゆくのを